平成29年4月1日発行（毎月1回1日発行）第69巻　第１号（通巻794号）

兵庫が育む　こころ豊かで自立した人づくり

兵庫教育

4月号
2017　No.794

特集 「学びの専門家」をめざして

― 先輩教員からの学び ―

「人づくりの県宝」　～県立宝塚高等学校～

月刊「兵庫教育」
URL:http://www.hyogo-c.ed.jp/kenshusho/

発　行：兵庫県教育委員会
編　集：兵庫県立教育研修所

目　次　4月号

特集　「学びの専門家」をめざして ー先輩教員からの学びー

学校訪問

人づくりの県宝
～学校の魅力づくりは，一人一人の魅力づくりから～　**県立宝塚高等学校**

巻頭言

明日の兵庫を担う人づくり
兵庫県教育長　**高井　芳朗**（たかい　よしろう）　1

特集記事

論　文

「学びの専門家」をめざして
―5W2Hと環境変化からの検討―
兵庫教育大学大学院学校経営コース 准教授　**當山　清実**（とうやま　きよさね）　4

教育実践

自ら学ぶ児童の育成をめざして
～図書館教育と校内研修の取組を通して～
新温泉町立温泉小学校 主幹教諭　**井上　緑**（いのうえ　みどり）　8

よき師に出会い，素直に学び，がまん強くあれ！
～若い先生方へのエール～
伊丹市立松崎中学校 教頭　**菰口　太志**（こもぐち　ふとし）　12

仕事をOJTにするために
～学校の特色を生かしたOJTの取組～
前県立氷上西高等学校 教頭　**長尾　均**（ながお　ひとし）　16

授業実践研修レポート

教科を越えて校内OJTを充実させる
～中学校音楽科 鑑賞「オペラ『アイーダ』」の実践を通して～
県立教育研修所　義務教育研修課
授業者：三木市立緑が丘中学校 教諭　**武田　愛子**（たけだ　あいこ）　24

「いじめ未然防止プログラム」の活用（第13回）

学校からの実践報告⑤
県立教育研修所 心の教育総合センター　28

授業づくり

繰り下がりのひき算が「わかる」ということ
神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教授　**岡部　恭幸**（おかべ　やすゆき）　30

各分野で活躍する ひょうごの教員

「わかった・できた」と実感できる授業づくり
～ICTの効果的な活用をめざして～
丹波市立中央小学校 主幹教諭　**足立奈保子**（あだちなほこ）　32

4 月 号	神戸市立花山小学校
イラスト	教諭　田中　智佳子

連載講座

特別な教育的支援を必要とする児童生徒への指導（第48回）
～特別支援学校と高等学校との交流及び共同学習の取組～

県教育委員会事務局　特別支援教育課　35

ひょうごの近代遺産（第10回）

旧日本専売公社赤穂支局（赤穂市民俗資料館）
（きゅうにほんせんばいこうしゃあこうしきょく（あこうしみんぞくしりょうかん））

県教育委員会事務局　文化財課　36

管理職による随想

幸せスイッチをオンに

前豊岡市立奈佐小学校長　**大月（おおつき）　祐三（ゆうぞう）**　37

施策解説

平成29年度「指導の重点」について

県教育委員会事務局　教育企画課　38

コラム「教育の接点」

三訓

神戸新聞社特別編集委員兼論説顧問　**林（はやし）　芳樹（よしき）**　40

編集後記

トピックス・P20～23

但　馬　朝来市立生野中学校
英語教育強化地域拠点事業 …… 22

播磨東　西脇市立しばざくら幼稚園
統合一園に寄せて …… 21

播磨西　太子町立太田小学校
歴史遺産　楯岩城址（たていわじょうし）に光を …… 22

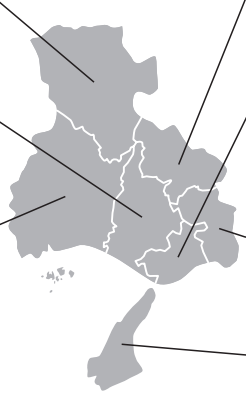
県　立　県立西宮高等学校
世界を視野に入れて …… 20

丹　波　篠山市立八上幼稚園
自然大好き！ふるさと大好き！ …… 23

神　戸　神戸市立有瀬小学校
笑顔あふれる有瀬小 …… 20

阪　神　伊丹市立荒牧中学校
学び合う同僚性 …… 21

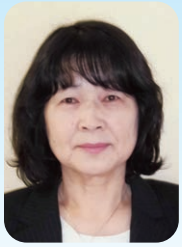
淡　路　淡路市立岩屋中学校
「トライやる」アクション …… 23



〈編集企画〉岡田　未来　片岡　正光　里　知純　瀬尾　智宏　武久　真也
本庄　仁　村中　利章　県立教育研修所（高校教育研修課，情報教育研修課）

特集 No.1 小学校

自ら学ぶ児童の育成をめざして
～図書館教育と校内研修の取組を通して～



新温泉町立温泉小学校
主幹教諭　井上（いのうえ）　緑（みどり）

1　はじめに

授業の主体は子どもである。授業が教師主導から児童主体へ転換されると，児童の学ぶ姿が変わる。課題解決のための方策を進んで探ろうとする姿，友達とのコミュニケーションを通して自分の考えをより明確にしたり深めたりしようとする姿，学習で身に付けた知識や技能を生活に生かそうとする姿等々，思考力や判断力・表現力を伸ばしながら，新たに気づきや知識を得て学びを深めていく児童に変容していく。

長く図書館教育と校内研修に携わってきたが，一貫してめざしてきたのはこの「自ら進んで学ぶ児童」の姿である。以下，児童の学びを支える学習・情報センターとしての機能の活用を探った図書館教育の取組と，「対話」を核とした授業づくりをテーマにした校内研修の取組について述べる。

2　自ら学ぶ力を育てる図書館教育

⑴ 学習・情報センターとしての学校図書館

学校図書館法では学校図書館は「学校教育に必要な資料を収集し（略）学校の教育課程の展開に寄与する」とあり，小学校学習指導要領総則においても「指導計画の作成にあたって配慮すべき事項」で「学校図書館を計画的に利用し，その機能の活用を図り，児童の主体的，意欲的な学習活動や読書活動を充実すること」と述べられている。学校教育の中核的な存在である学校図書館が児童の自ら学ぶ力を育てる場所であるためには，学習・情報センターとしての機能の充実を図るとともに，その機能をどう学習に活用していくかが重要になってくる。そこで，読書指導はもとより利用指導にさらに重点を置いて実践を積み重ねてきた。

⑵ 具体的な取組

①図書館環境の整備

・調べ学習に対応できる資料の充実（計画的な購入，公共図書館との連携）
・NDC（日本十進分類法）による配架
・資料検索のための「図書館マップ」掲示
・児童の作品展示（各学年で行う調べ学習への興味を持たせ，意欲付けを図る）

②図書館や図書館資料を利用する技能を育てる

図書館資料の中には国語辞典や漢和辞典，新聞，地図のように主に教科学習において活用するものもある。系統立てて指導に取り組めるよう「図書館教育年間指導計画」等を作成し，６年間を見通した利用指導について全職員で共通理解して取り組んできた。また，より指導を徹底するために，ワークシート（「学校図書館学び方指導のワークシート」全国学校図書館協議会編，全国学校図書館協議会）も利用して学習を進めた。

ア　学校図書館を利用する技能

【１年生学級活動「学校図書館のきまり」】

○目標

学校図書館のきまりを知り，自ら本を大切にしようとする気持ちを持つ。

○学習の様子
「虫の本と魚の本を借りて調べます。友達だからね」「これから本の声を聞いて借ります。勉強するのが楽しかったです」等の感想があり，学習後は本を借りる児童が増えた。丁寧に本を扱い，外れたページに気づくと図書委員に修理を頼む姿も見られた。

イ　課題に応じて図書館資料を利用する技能

【３年生国語「本を使って調べよう」】

○目標
百科事典の使い方を理解し，進んで調べることで語彙を広げる。

○図書館資料「ポプラディア」（ポプラ社）他

○学習の様子
巻やページの見つけ方を学んだあと，ワークシートを使って調べていった。児童は徐々に百科事典の引き方に慣れ，新しく知る楽しさを味わいながらどんどんページを見つけていた。「私は夢が博士なのでもっともっと知りたい」「百科事典はいろいろなことを知ることができてすごかった。たくさんのことが分かった」等，調べる楽しさが学習後の感想からも伝わってきた。

▲ 百科事典を使って意欲的に調べる

③図書館資料を活用して学習を深める
授業のねらいを達成するために教師が読み聞かせを行ったり，授業後も児童が自由に読めるように教室にコーナーを設けたりしている。資料は子どもの感性に直接響く。学習意欲を高め，理解を深める一助となった。

【４年生学級活動「感謝の心」】

○目標
多くの人々の苦労や努力，動植物の命への感謝の心を持って給食を食べようとする気持ちを持つ。

○図書館資料「いのちをいただく」
（内田美智子　作　西日本新聞社）

○学習の様子
「いただきます」「ごちそうさま」の言葉に込められた感謝の心について話し合った後，読み聞かせを行った。その後の意見交流では，「本を読んで泣きそうになりました。嫌いなものでも少しでも多く食べようと思います」「もっともっと感謝をしたいです」等，本時の目標につながる児童の発言が多く見られた。

④図書館資料を利用して課題解決を行う
「問題を見出す」⇒「調べる」⇒「まとめる」⇒「伝える」という活動を支えるため，授業の担当教員や公共図書館と連携を取りながら図書館資料を用意している。児童は調べ学習に意欲的に取り組むが，著作権等，情報モラルについての学習の不十分さも感じる。情報教育担当とも連携し，学年の発達段階に応じて指導している。

【４年生社会「火事からくらしを守る」】

○目標
人々の安全を守るための関係機関とそこで働く人々の工夫や努力について考えたことを適切に表現する。

○図書館資料「まちの施設たんけん⑤消防署」
（坂井秀司監修，小峰書店）他

○学習の様子
調べて分かったことを，「調べたことを整理して書こう」という国語の単元での学習を生かしてグループ毎に新聞にまとめた。意見交流では，各グループの発見や表現の良さを活発に伝え合っていた。

3　「対話」を核とした授業をめざした校内研修

(1) 伝え合い，学び合う授業づくりの研究

教科の特質をふまえながら，「伝え合う力」

「学び合う力」の育成をキーワードに指導力の向上と授業改善に取り組んできた。児童が課題にじっくり向き合い，そこから生まれる自分の考えを小集団や全体の場で友達と伝え合うことにより，自分の考えをより磨き上げながら課題解決に至り，本時のねらいに迫っていく過程を重視した授業である。

めざす授業づくりの核は「対話」。「一対一の相互理解の上に，一対多の話し合いは成り立つと言える」（『音声言語指導大事典』高橋俊三編　明治図書）とあるように，「対話」が成立して初めて，「話し合い」を成立させることができる。現・環太平洋大学長谷浩也教授（当時は姫路市立太市小学校教諭）の指導を受けて「対話」重視の取組をスタートさせて15年になる。この「対話」では児童二人が交互に話し手と聞き手になって話を進めていく。聞き手は，相手の考えを肯定的に受け止めながら自分の考えと比べて感想を伝えたり，もっと詳しく知りたいと思うことを質問したりするので，互いの考えがより明確に，より深くなっていく。

また，個々の児童の学習への意欲は，温かい心のふれあいに基づく学級づくりがあってこそ育まれる。児童が互いを大切にする心を育むことで学級全体が温かな人間関係と信頼関係に支えられた学習集団へと成長していく。その中でこそ，個々の児童の主体的な学びが生まれる。対話はそのためにも有効な言語活動であると考える。

以下，対話を生かした国語科授業の実践と，安東茂樹先生（京都教育大学副学長）に指導を受けながら進めた家庭科授業研究の取組について紹介する。

⑵ 具体的な取組

①対話を生かした３年生国語科授業

ア　単元名　「聞いて楽しもう　たのきゅう」

イ　本時の学習

○目標

友達との対話を通して自分の感想を深めることができる。

○展開

学習活動	指導上の留意点と評価（☆）
1．本時の課題をつかむ。 ・前時を振り返り、自分の感想を見直す。 ・本時の課題を知る。	・挿し絵を手がかりに「たのきゅう」の話を振り返らせる。 ・新たに感想を持った児童には、前時の初発の感想に付け加えさせる。 ・本時の課題を知らせる。
友だちと対話をして、「たのきゅう」の楽しさをひろげよう	
2．対話をして感想を交流する。 予想される児童の感想 ・「たのきゅう」と「たぬき」を間違えたこと ・わざと「小判が嫌い」と言って手に入れたこと ・言い方（方言）	・対話をして、自分の考えと同じ所や違う所、友達の考えの良さを見つけることを伝える。 ・対話のポイント（「受け止める」「質問する」）を伝える。 ☆相手の考えを受け止めることを基本に、分からない所は質問して対話を進めようとしているか。 ・対話を通して考えたことを整理するため、１回の対話が終わるごとに自分の考えと同じ所や違う所、良い所を附箋に書く。
3．終わりの感想を書く 4．学習のまとめをする。	・メモをもとに終わりの感想をまとめさせる。 ☆メモした事柄も入れながら、終わりの感想をまとめているか。 ・初発の感想と比べて終わりの感想が深まった理由を話し合わせる。対話をすることで自分の考えが広がり、深まったことを実感させ、対話への意欲付けを行う。 ・班で互いの感想を読み合って、よい所を伝えさせる。

○授業の様子

感想交流は一対一の対話で行った。どの子も初めの感想より対話後の感想が詳しくなっていた。その理由を尋ねると，「友達の質問に答えようと詳しく考えた」「なるほどと聞いてもらえてうれしかった。もっと言おうと思った」「私と違う感想があっておもしろかった」という答えが返ってきた。

対話を通して児童は伝え合う楽しさを味わい，さらには「たのきゅう」の世界のおもしろさも味わうことができたと考える。対話を行う時の児童の目の輝きと表現のすばらしさに心が動かされる。真っすぐ相手の目を見つめる真剣さと優しさが感じられるからである。

▲ 対話で感想を交流

②家庭科授業研究会

○研究テーマ

「こころ豊かに，よりよい生活を
創り出す授業づくり」
～伝え合い，学び合い，
自ら実践に生かす子どもの育成～

「伝え合う力・学び合う力」を基本として，家庭科教育がめざす，児童が自ら自立する基礎的実践力を育んでいけるような授業の在り方を探った。授業づくりの視点をより学習の主体を意識した「ものとの主体的な関わり」「人との豊かなふれあい」「生活の創意工夫」として焦点化し，研究仮説（授業プラン）をたてて検証することにした。

【５年生での授業実践】

ア　題材名「はじめてみよう　クッキング」

イ　小題材名　家族のために“あったかサラダ”を作ろう

ウ　本時の学習（本時９/10）

○目標

調理実習で学んだことを生かして，家族に食べさせたい野菜サラダを考える。

○展開

学　習　活　動	指導上の留意点・評価と支援
１課題をつかむ ・前時までの調理実習を振り返る。 ・本時の課題を把握する。	・調理実習の様子や作った野菜サラダの写真を掲示し、調理実習時によく工夫されていた点を紹介し、工夫の視点を広げさせる。【ゆで方・切り方・味のつけかた・盛り付け方・材料　の洗い方・片づけ方など】 ・自分達でできたことを称賛し、自信を持たせる。 ・調理実習で学んだことを生かして、家族に食べさせたい“あったかサラダ”（あったか：ゆで野菜を使用・家族の方へのあたたかい心がこもっている）を作ることを知らせる。
家族に食べてほしい“あったかサラダ”を考えよう	
２家族に食べてほしいあったかサラダを考える。 ・あったかサラダの計画を考える時に大切にしたい事を発表する。 ・ワークシートに計画を記入する。	・児童の発言やＧＴの話から“あったかサラダ”を考えるポイントをまとめ、見通しを持って計画が立てられるようにする。 ※ＧＴ…ゲストティーチャー **家族の喜ぶ顔が見たいな**（好みや健康を考える） ○ゆでた緑黄色野菜＋生野菜＋ゆで卵 ○調理実習で学んだことを生かす。 （卵と野菜のゆで加減、切り方、盛り付け方） ○旬の野菜を使う。 ・机間指導を行い、児童の生活実態を元に計画が立てられるよう助言する。計画をたてるのが難しい児童には野菜や切り方カード等をヒントにするよう助言する。（Ｔ１、Ｔ２） ・専門的な立場から良さを認めたりアドバイスをしたりして、児童の発想を深められるようにする。（ＧＴ） ・家族への思いが伝わる言葉、家庭科の言葉（調理の仕方、色や味、食感を表す言葉など）で説明を加える。（Ｔ１・Ｔ２・ＧＴ） 〔評価基準〕 Ａ：自分の家族をイメージして、野菜サラダ作りの具体的な計画を立てている。 Ｂ：学習したことを元に野菜サラダ作りの具体的な計画を立てている。 Ｃ：野菜サラダ作りの計画を立てることができない。 〔評価の方法〕ワークシート 〔Ｃの児童への支援〕 家族の好きな野菜を想起させる。調理実習から学んだことを生かすよう個別に指導する。
３考えたサラダを紹介し合う。 ・対話 ・全体の場で	・対話を行い、自分のあったかサラダの工夫を伝え合う。友達の考えの良いところをメモしておく。 ・全体の場での発表では児童が対話で知った友達の工夫を紹介する。教師が工夫の見られる児童を把握して意図的に指名し、発表させる。
４学習のまとめ ・ＧＴの話を聞く。 ・実践報告会について	・今日の学習の評価をして、実践への意欲を持たせる。（ＧＴ） ・実践報告会の仕方について連絡をして実践への意欲を持たせる。（Ｔ１）

○授業の様子

本時の授業は，初めて学んだ調理の基礎的・基本的な技能を基に，家族に喜んでもらえるようにと工夫して計画を立て，家庭での実践につなげていくことがねらいであった。児童一人一人の豊かな発想を引き出すためには，個人思考の時間が保障され，その考えが友達との対話や全体での話し合いによって深められることが大切である。対話の中で「彩りがきれい」「“おじいちゃんが好きなのでゴーヤを工夫して使う”という考えがいい」と，互いの計画の良さを認め合う言葉が聞かれた。

児童の実践に家族の方から寄せられたコメントは感謝や努力を認めるものばかりだった。児童が自己有用感を高め，家庭での実践意欲を高めることにつながる学習だった。

4　おわりに

(1) 図書館教育の取組

図書館を授業に活用すると学習の深まりや広がりがあり，児童の学びがより主体的になることを実感した。また，疑問点や興味を持った事を図書館に行って進んで調べる児童が見られるようになった。学習・情報センターとしての機能への関心の高まりは，生涯学習につながる成果であると考える。今後も司書教諭としての専門性を高め，積極的な図書館活用ができる体制作りを進めていきたい。

(2) 校内研修の取組

講師を招聘して全職員で理論研修を深めながら，授業研究会で討議を重ね，授業力の向上を図ってきた。その結果，授業に課題解決的な学習や体験的な活動が多く取り入れられ，児童の学習意欲の高まりや学ぶ姿の変容が見られた。また，対話を中心として言語活動に重点を置くことによる伝え合う力の向上も見られた。職員の変容が児童の変容につながっており，「自ら学ぶ」児童の具現化に向けて成果が得られたといえる。

次期学習指導要領では，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。目指す児童のイメージを具体的に持って，職員の共通理解を深め，伝え合う楽しさ，学び合う喜びのある課題追究型学習を推進し，今後も授業改善に努めていきたい。

特集 No.2 中学校

よき師に出会い，素直に学び，がまん強くあれ！

～若い先生方へのエール～

伊丹市立松崎中学校
教頭　菰口（こもぐち）　太志（ふとし）

1　はじめに

「教員の世界は落語や大相撲の世界と同じである」「最初の３年（１サイクル目）は先輩について，授業・行事・部活動・校務分掌を徹底的に学び，次の３年（２サイクル目）で，先輩に見守ってもらいながら，自分が主となり生徒の活動を引っ張っていく。そして，異動した２校目で自立した教員として仕事ができるようになること」

これは私が初任の頃先輩教員に言われた言葉である。この４月から多くの学校で初任の先生方が「ワクワク・ドキドキ」しながら教員生活をスタートさせていると思う。また，初任の先生方への研修制度もシステムとして充実しており，拠点校指導教員や教科等指導員，メンターが選任され，とても恵まれた環境である。私が初任の頃とは随分違い，うらやましい反面，当時はそのようなシステムがなくとも，各学校の中で自然とそのような環境が出来上がっていた気がする。

そこで今回は，私のこれまでのつたない経験を振り返り，大きく３つの柱（校内研修・OJT・教科研修）について述べることで，若い先生方へのエールとしたい。

2　校内研修

中学校教員の大きな使命のひとつは「進路保障・学力保障」である。つまり，「授業が命」である。生徒が一日の大半を過ごす教科の授業において，全ての教員が授業力向上を図らなければならない。そのため，毎年各学校とも２～３年のスパンでの見通しのもと，研究テーマを掲げ，授業実践を行っている。ただ，中学校の場合，教科担任制のため，研究テーマの設定が難しい。「自分の教科には関係ない」「自分の教科では無理」などの声が上がると，学校としての共通理解が得られず，チームとして機能しない。管理職と研究推進委員会のメンバーが中心となり研究テーマを設定する際，全教科・全教員が共通して取り組めるようにする必要がある。

以下に，現任校の研究テーマ，実践研究の方法について紹介する。平成27年度伊丹市教育委員会指定　伊丹市立松崎中学校『研究のまとめ』を基に述べる。

＜研究テーマ＞

生徒指導が機能する授業実践

―生徒指導の三機能に視点を置いた「ペア・グループ学習」における教員独自の手立てを通して―

＜はじめに＞

学校現場では生徒指導というと，きまりを守らせる「指導」や窃盗，万引き，無断外泊などの反社会的な問題行動に対する「指導」，さらには不登校，無気力などの非社会的な問題行動に対する「指導」を意味することが常である。

平成22年の『生徒指導提要』（文部科学省）では，次のように述べている。

> 生徒指導は学校の教育目標を達成する上で重要な機能を果たすものであり，学習指導と並んで学校教育において重要な意義を持つものと言えます。各学校においては，生徒指導が，教育課程の内外にお

いて一人一人の児童生徒の健全な成長を促し，児童生徒自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指すという生徒指導の積極的な意義を踏まえ，学校の教育活動全体を通じ，その一層の充実を図っていくことが必要です。

各教科や学校行事，部活動等の特別活動を含む全ての教育活動において生徒指導の三機能（坂本，1990）である「自己存在感を与える」「共感的人間関係を育成する」「自己決定の場を与える」を生かした実践が必要である。そこで，これら三機能を生かした授業をするため，「ペア・グループ学習」において教員独自の手立て（工夫）を取り入れた。その結果，学力の向上と問題行動件数の減少といった成果がみられた。

＜実践研究の背景＞

平成25年度，朝の校門では，登校してくる生徒に対して，「シャツを入れなさい」「そのズボンは何だ」「髪の毛に何をつけてる」「スカートが短い」といった教員の指導する声が響き渡っていた。教員の指導に従わず，暴言を吐いたり，暴れたりする生徒が毎日のようにいた。授業中も４～５人の生徒が机に伏せているにもかかわらず，授業の進行を優先し教員が声をかけることもそこそこに，黒板の前から動かず一方的に説明をしていた。当然，生徒と教員の関係はよくなく，全国学力・学習状況調査結果も全国平均を下回っていた。こうした生徒指導上の課題を解決するためには，１日の大半を過ごす教科の授業において，全ての教員が生徒指導が機能する授業を行うことが必要であると考えた。

＜公開授業・学習指導案＞

この研究の目的を達成するため，全教員が年１回必ず公開授業を行う。その際，統一した様式の学習指導案を作成し，各教科で検討を重ねたものを研究推進委員会に提出し，検討する。多くの場合は，ここで各教科・各個人に差し戻しとなる。その後，再度教科で検討し，研究推進委員会に提出，公開授業実践となる。初任者研修や，２年次・３年次研修でも学習指導案は作成する。若い先生方にとっては，校内で統一された様式，条件に沿って学習指導案を作成することは，思った以上に時間がかかり大変なこともあるが，授業力向上に効果的であると考えている。

＜学習指導案作成時のポイント＞

① 本時の目標の明確化

この授業でどのような「力」をつけるのか，授業後に生徒が実感できる「力」を明記する。

② 授業者ならではの「見せ場」の設定

「力」をつけるために，いつ，何をするのかを「手立て」として明記する。また，ペア・グループ学習でどのように他者とつながり合いながら，「わかり」を確かなものにしていくのかを明記する。また，なぜ，このグループ学習が必要なのかを明記する。

③ 評価規準・評価基準の設定

この授業で力がつくとは「どうなることか」を明記した規準，及び，３段階（Ａ，Ｂ，Ｃ）で評価するための基準を明記する。

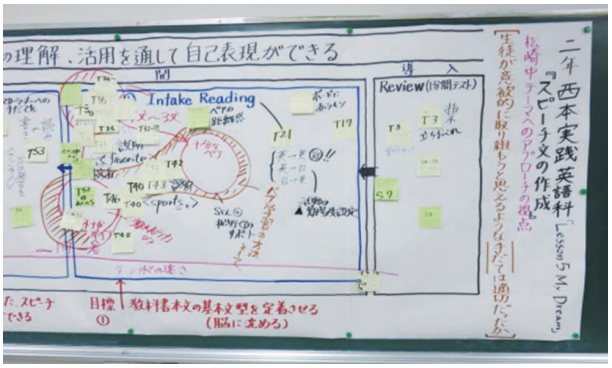
④ 授業者による支援

ＢをＡに，ＣをＢにする支援を明記する。

＜授業研究会・事後研究会＞

学期に１回授業研究会を持ち，全教員が授業参観する中で，授業者と生徒の発話記録をとり，それに基づいた事後研究会を行う。この方法は４年間兵庫教育大学大学院教授の勝見健史先生にご指導いただいたものである。

事後研究会は，授業について振り返る場であると同時に，教員が授業を見る眼を鍛える場とした。全教員が授業の流れを書いた模造紙に発言項目を書き込んだ付箋を貼り付け，意見を述べ合ったり，小グループに分かれて代案を考えたりする。若い先生方は，この事後研究会を通して，「授業参観力」や「授業鑑識眼」が養われている。



▲ 事後研究　英語科

＜授業参観と事後研究会のポイント＞

① 授業中の教員と生徒の発言と動きの記録

授業者の発問，生徒の発言や動きを全て書き留め，それをもとに，参観者一人一人が気になった場面について意見を述べ，改善策等を発表する。

② 授業の流れの振り返り

参観者が意見，改善策を発表する際，授業の流れを書いた模造紙に発言項目を書き込んだ付箋を貼り付け，どの場面で，どのような発言であったかを全員が共有しながら，事後研究を進める。

3　OJT（授業・行事・部活動・校務分掌）

部活動の早朝練習に始まり，放課後の学習会・部活動，事務処理，時として保護者対応，さらに土日の部活動など，中学校現場の毎日は多忙である。そんな中で様々な研究会に参加する時間を確保するのは難しい。日々の業務の中でOJTの手法をいかに有効活用するかがカギである。

⑴ 授業交換・教科部会

「週１時間の授業交換」これは，私が初任時，先輩教員からしていただいたことである。週１時間，先輩教員の授業を必ず見に行く。反対に週１時間先輩教員に授業を見てもらう。１年間これを実施した。教員によっては「持ち時間数が多くて…」という場合もあるが，授業力向上には一番効果があると思われる。本校では，授業のない時間に各学年１名ずつがチームとなり，校内巡回指導を実施しており，時間がないという教員は巡回後の残った時間に授業参観に行く方法もとれる。いずれにしても，行ったり行かなかったりではなく，自分の時間割の中に組み込むことである。「継続は力なり」である。

また，教科の配当人数にもよるが，できれば週１回時間割の中に教科部会を組み込み，先輩教員から様々なことを学ぶ機会をつくることである。教科指導力は格段に向上する。

私自身も，教科の年間指導計画にはじまり，単元構成，授業構成，指導方法，場合によっては学級経営，部活動指導，保護者対応に至るまで実に様々なことを学ぶことができた。時間割の中に組み込まれているので負担感もそれほどない。

⑵ 校務分掌上のペアリング

＜はじめに＞でも書いたように，行事や校務分掌における企画力・運営力・段取り力を身につけるためには，初任からの最低３年間（１サイクル＝入学～卒業）は先輩教員について学ぶことである。そしてそのためには年度当初に管理職，学年主任が中心となり，ベテランと若手のペアリングを調整する必要がある。その際，学年セクトに陥らないように注意する必要がある。チーム学校として若い先生方を育てていく視点を持つことである。

▲ 授業研究会　保健体育

4　教科指導（市内統一テーマでの研究）

ここまで校内に関わることについて述べたが，中学校教員として教科指導力を向上させることは必須である。多くの市・町・地区で，それぞれの教科の研究テーマを決め，研究協議会等を行っている。以下に，私の勤務地，伊丹市の中学校英語科の取組について紹介する。

⑴ 英語科教員研修会

学期に１回大学教授を講師として招聘し，市内英語科教員研修会を実施している。年度当初に設定した市内英語科共通のテーマに基づいた講演をしていただき，授業実践に活かし，毎年各校持ち回りで実施している研究発表会にもつなげている。また，毎年若い先生方を中心に公開授業を行っている。公開授業をするとなると，学習指導案の作成から授業準備まで多くの労力が必要であるが，教科の指導力を伸ばす大きなチャンスであるので，どんどん自ら進んで公開授業をしてほしい。

⑵ 市内英語科研究のまとめ

伊丹市の中学校英語科では毎年，『研究のまとめ』を作成し，冊子にして研究発表会の時に全英語科教員に配布している。この『研究のまとめ』作成にあたっては，各学校で全英語科教員に原稿作成を割り当てている。自分が１年間取り組んできたことを振り返るとともに次年度に向けての準備にもなる。また，他校の取組をじっくりと読み，自分の授業に取り入れることができる。

5 おわりに

最後に，平成29年３月末に私の勤務校伊丹市立松崎中学校でご退職された前校長蘆原時政氏のことばを紹介する。蘆原氏には，初任時，生徒指導担当時，教頭時と，３校３度にわたりご指導していただき，育てていただいた。

以下，平成28年度伊丹市立松崎中学校『研究のまとめ』より一部抜粋する。

「先生のような先生になりたい」

このように言われる先生が，この松崎中学校に何人いるだろうか。

教員志望の理由に，昔教わった先生を見て，なりたいと答えた人に何人か出会ったことがある。しかし，現場の教員を見ていると，生徒にそのように慕われ，思われている教員が，果たして何人いるのだろうかと思う。教員養成は，大学で始まるのではなく，小学生や中学生時代の先生との出会いから始まっている。私たち教員は，毎日の授業，行事，部活動で，未来の教員を何人育てているのだろうか。（中略）

しかし，その授業実践で最も大切なことを忘れているのではないかと感じている。これは，昨年度から授業改善が目に見えて進んでいない現状から感じることである。教員自身がチームとして「共感的人間関係」の中で，「自己存在感」を持ち，「自己決定」しているのか。教員自身がこれらを実感しないまま，授業をしているのであれば，何を語っても，それは原稿を棒読みしているだけの授業になって，生徒に何も伝わらないものになってしまう。

生徒が一定落ち着いてきて，教員が少々手を抜いても，生徒が自分たちでできるようになってきた。ここが，学校が崩れる一番の落とし穴である。（中略）

生徒指導は自己指導能力の育成である。言い換えれば，人間力の育成である。本校の生徒は，確実にこの人間力を身につけてきている。学校行事に積極的に取り組んでいる生徒が増えて，一生懸命取り組んだ後，確実に感動を味わっている生徒が増えてきた。その生徒の変わり様を以下に紹介する。

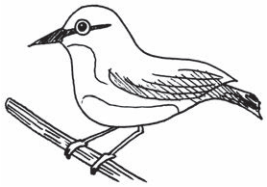
【平成26年度合唱コンクール後に３年生が書いた作文の一部】

私は毎年この時期になると学校へ行きたくなくなります。なぜかというと合唱コンクールがあるからです。今年も曲が決まり，テンションが下がってやる気が全くナシの状態で練習していた自分。（以下略）

【平成28年度合唱コンクール後に２年生が書いた作文の一部】

私は文化発表会が大好きで，中でも特に合唱コンクールが毎年楽しみで，他の学年，クラスの合唱を聴き，自分のクラスの合唱を一生懸命歌うのがとても素敵だと思います。キレイな声でハモって，身体を揺らし，何よりお客さんに感動を与えるような合唱にしたかったのです。（以下略）

以上が蘆原氏が本校に遺した財産である。次期学習指導要領では，資質・能力として３つの柱があげられている。「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」。とりわけ，「学びに向かう力・人間性等」は，私たち教員自身にとっても欠かすことのできない資質・能力である。「こんな授業をしたらおもしろいのでは？!」「生徒がワクワクするのでは？!」と，主体的に学びに向かう教員を目指して，お互い日々研修に励んでいきたいと思う。



特集 No.3 高等学校

仕事をOJTにするために
～学校の特色を生かしたOJTの取組～

前県立氷上西高等学校
教頭 長尾（ながお） 均（ひとし）

1 はじめに

本校は平成24年度から丹波市立青垣中学校・丹波市立氷上中学校との連携型中高一貫教育校となり今年度で６年目を迎える。「輝く地域の星となれ　～一人一人が主人公～」の学校スローガンのもと，地域に根ざし地域に貢献する魅力ある学校，信頼される学校を目指している。具体的には「規律のある学校」「落ち着きのある学校」「学びと活気のある学校」を目標として様々な教育活動を行っている。

その中で，本校の若手教員が仕事に対してどのように取り組み，教員として成長しているのかを紹介したい。

2 仕事がOJTになるために

本校は，各学年１クラスの小規模校であり，校務分掌はベテラン教員が専門部の各部長，若手教員が担任と学年主任を兼ねており，ほとんどの教科担当者が一人だけという組織である。若手教員にとっては教科指導や生徒指導，学級経営で直接アドバイスを受ける機会が少ないことが少人数ゆえのマイナス要因である。

しかし，本校には少人数だからこそ自分自身の仕事に対する取り組み方次第で教員として成長する機会がたくさんある。

浅野（2009）（注）によれば，仕事がOJT（On the Job Training）となるための条件とは，その仕事が本人にとって「やや難しいレベル」であること，その仕事のサブ担当ではなく，「責任者として携わる」こと，そして苦労した末に何とかうまくできた「達成感」の三つがそろうことである。

本校は教員組織が小さいため，若手であっても一人が一つの仕事を丸ごと任されることが多い。必然的に「責任者として携わる」ことになる。ここで大切なことは責任者として携わるとはどういうことなのかを若手教員が考えることである。この仕事は学校としてどのような意味を持っているのか，生徒に対してどのような教育効果を目指すのか，それをどのように評価し次の改善に生かすのかというところまで考えることである。このように考えて取り組むことで仕事は「やや難しいレベル」となる。

本校では，計画の段階で目的や具体的な実施方法をしっかりと考えるために，計画案だけでなく，地域にも広く知ってもらいたい行事については新聞社への取材依頼を行う。新聞社へ依頼するためには，まず計画者自身が行事の目的と内容を理解し，端的な言葉で伝える必要がある。また，行事の終了後には学校ホームページに掲載する記事を書く。そのためには生徒はどのように活動していたのか，終わってからどんな感想を持ったのか，地域からの評価はどうだったかなど様々な振り返りを行う必要がある。そうすることで，自分が責任者として携わった取組の評価を行い，その結果として「達成感」を得ることができるのである。

3　学校の特色を生かしたOJT

(1) 地域行事への参加

毎年11月に本校のある青垣町佐治地区では，この地区が昔，宿場町だった頃の賑わいを取り戻そうと地元の商工会が中心となって「八宿（はっしゅく）まつり」という祭りが行われる。本校は生徒会が中心となって，毎年多くの生徒が参加している。特に佐治地区でまちづくり活動を行う「関西大学佐治スタジオ」と連携して行っている地域の伝統の「うどん作り」と「丹波布の販売」は，地域で好評である。

「八宿まつり」の本校担当者は，生徒会担当の若手教員である。事前準備として地元の商工会や自治会との打ち合わせに参加する中で，担当教員はこの祭りに生徒を参加させる意味を考えた。そして「地域を知り地域に貢献することで，地域から感謝され必要とされる喜びを生徒に感じさせ，生徒の自己有用感を育てる」という意味づけを行った。

▲ 八宿まつり

「八宿まつり」に参加した生徒の多くは「楽しかった」という感想を持っている。担当教員は「楽しかった」という言葉が生徒自身の中で終わってしまうのではなく，地域の方にも「楽しかった」と思ってもらえる取組になるように次につなげていきたいという思いを持っている。そのためには生徒自身に自分たちの取組の意味を考えさせることが必要だと考え，オープン・ハイスクールなどで生徒に活動発表の機会を作っている。もちろんこれは教員自身が取組の意味を考えることにもなっている。

このような「八宿まつり」の取組に対して地元の商工会の方から次のような感想をいただいている。

> 西高は変わった。ここ最近の西高は地域への関心が高く，イベントなどでも地域を盛り上げてくれています。大人の我々は，地元に愛着を持ってもらい，丹波に残る，もしくは将来丹波に帰ってきて欲しいと思っています。西高生がもっと地元でいろんな事にチャレンジ出来るようにサポートしていくので，失敗してもいいから自分たちで企画して，チャレンジしていって欲しいと思っています。田舎の小さい町だけど，楽しくなってきました！！

生徒はこのような体験活動を通して地域から感謝される喜びを少しずつ感じており，地域貢献活動に自主的に参加する生徒の人数はここ２年間で大幅に増えている。

(2) キャリア教育の取組「丹波夢授業」

兵庫県丹波県民局の主催する丹波地域ビジョン委員として活躍されている起業家の方々の協力を得て「丹波夢授業」という取組を行っている。ビジョン委員の方と生徒たちがディスカッションを通して職業観について考える取組である。進路指導部と連携して２年生の担任が担当者となって取り組んでいる。本校では２年生全員がインターンシップを行うためその事前指導の一環として行っている。

進路指導における本校の課題として，進路に対して主体的に考え行動する意欲が低いことが挙げられる。２年生の担任はこのことについて，生徒は将来の自分の職業を考えるときに今の自分とのギャップを感じて，とてもハードルの高いものとして捉えているのではないかと考えている。そこで「丹波夢授業」を行うことで，実際に社会で働く大人と対話

をする中で，そのハードルを下げることができるのではないかと考えた。

授業では，ビジョン委員の方１人につき生徒５～６人の小グループに分かれて，生徒がインタビューを行い，それを発表するという形で行った。現在の仕事や，高校時代の話，仕事を通しての経験談などそれぞれのグループで生徒たちは積極的に話を聞いていた。

▲ 丹波夢授業

担任は「丹波夢授業」を通して，働くことに関して自分の夢を持ちそれに向けて実際に行動している大人の姿を生徒は「かっこいい」と思うようになってきたと述べている。また，ホームページには「夢を持たなければだめなわけではなくて，仕事に就くことがゴールではない。むしろそこから始まるという話は生徒たちにとって印象的であったようです」と記した。

この内容からは，「キャリア教育」とは何なのかを教員が自らの取組を通じて実感していることがわかる。平成23年の中央教育審議会答申で，キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け，必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して，キャリア発達を促す教育」と説明されている。若手教員にとって「進路指導」と「キャリア教育」との違いを考える機会は少ない。しかしこのような取組を担当し，生徒の活動を振り返る中で「キャリア教育」とは何かを実感として理解することは必ず次の取組に生きてくるはずである。

⑶ 基礎学力の定着に向けた取組

本校には義務教育の段階で学習につまずいている生徒や，家庭学習の習慣が確立されていない生徒もおり，基礎学力の定着が大きな課題となっている。その克服のため，少人数授業を行い，各教員が工夫をしながらきめ細かな指導を行っている。その結果落ち着いた雰囲気で授業を行っているが，基礎学力のついていない状況では高校の学力は定着していかないのが現状である。

▲ 中高連携授業

そこで，平成28年度から１年生の英語，数学を中心として連携中学校との授業や小高連携いきいき授業などで教員が学んだことを生かした「学び直し」の取組を始めた。

英語科では中高連携授業の中で，単語の発音の仕方がわからないということが，英語がわからないことに繋がっているのではないかと感じ，本校での授業の中で音読の指導に時間をかけるようになった。教科の指導方法を目の前の生徒だけでなく，その生徒たちがこれまでどのような指導を受けてきたのか，何につまずいてきたのかを中学校での連携授業の中から見つけ，その具体的な方法を実践している。

数学科では平成28年度は中高連携に加えて小高連携いきいき授業を近隣の小学校で行った。それらの取組を通して，小中高と年齢が上がるごとに間違えることに対する恐怖心が増していることを実感した。そこで本校の授

業の中で，間違えてもいいから自分で解いていくことを意識させ，生徒が自分で考えるための支援を意識するようになった。この授業スタイルも他校種との連携授業で得た気づきを自分の授業に生かしている例である。

さらに数学科では「学び直し」のための具体的な取組として「数学山登り」という学習法を始めた。数学の基本的な計算問題を細かくレベル分けし，登山に例えて生徒自身が自分の理解の段階に合わせてプリント学習をしていくものである。そこでは単に復習をさせることが目的ではなく，高校の学習につなげることを常に意識しながら指導を行っている。教員は「学び直し」を行うに当たり，基礎学力の定着が高校の学習につながるということと，自主的に学ぶ姿勢を身につけるということを生徒に対して繰り返し伝えている。

これらの「学び直し」の取組を評価するために生徒アンケートを行った。このアンケートは英語・数学それぞれの教科担当である若手教員が作成した。はじめに作ったものは質問が整理されておらず焦点が絞れていない状態であった。そこで，この取組の狙いは何なのか，それを評価するためには何をどのように聞けば良いのかを何度も考え，以下のようなアンケート様式となった。アンケートを作ることを通して担当教員は自分の取組は何を目的として，その結果生徒にどのような力をつけたいのかを深く考えるようになった。

英語基礎プリント(学び直し)について　1年生

		とてもそう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	ほとんどそう思わない
①	英語基礎プリントで学ぶことで授業の内容がよく理解できるようになった	9	23	4	1
②	中学校の内容からの復習ができる	19	13	3	2
③	基礎から段階的に勉強することの大切さがよくわかる	14	20	2	1
④	自信を持って英語を音読できるようになってきた	8	18	9	2
⑤	どのような場面でどのような英語を使用するか理解できた	9	19	7	2
⑥	自分から積極的に授業を受けることができている	5	26	5	1
⑦	以前よりも家庭学習を含めた英語の学習に対して前向きになってきた	4	15	13	5
⑧	英検を受けたいと思う(英語基礎プリントは英検4級～3級の内容)	3	7	12	15
⑨	来年度以降も実施してほしい	14	17	3	3

数学山登りについて　1年生

		とてもそう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	ほとんどそう思わない
①	数学山登りの授業で一つずつできるようになっていくのが楽しい	7	19	9	1
②	自分がどこまでできたのかがよくわかる	13	19	4	0
③	基礎から段階的に勉強することの大切さがよくわかる	11	17	8	0
④	小中学校の復習が自分のペースでできる	19	14	2	1
⑤	苦手な点を先生から丁寧に教えてもらえる	7	22	6	1
⑥	計算問題ができるようになってきた	12	14	10	0
⑦	文章問題ができるようになってきた	5	12	11	8
⑧	自分から積極的に授業を受けることができている	9	19	8	0
⑨	数学山登りの授業を増やしてほしい	15	11	8	2
⑩	来年度以降も実施してほしい	15	11	8	2

平成29年度から学校設定教科「パワーアップ」を設定し，義務教育段階での「学び直し」をカリキュラムの中で行うこととなった。アンケート結果から次の課題を見つけ，具体的な取組に移していくことが必要である。

4　おわりに

「学びの専門家」を目指して―先輩教員からの学び―というテーマをいただき，氷上西高校の若手教員の様々な取組を紹介することで教員の成長について述べてきた。私が今感じるのは，教員は目の前の仕事を通して成長する部分が大きいということである。また，その仕事を自分の成長に結びつけられるかどうかは自分自身の仕事への向き合い方にかかっているのだと感じる。

若手教員の皆さんには一つの行事について無事にやり終えたことに満足するのではなく，常に振り返りを行うことで課題を見つけ，さらに良い方法を考え続け，学び続けてほしいと思う。

［参考文献］
（注）浅野良一（2009）「学校におけるOJTの効果的な進め方」pp.15-16
教育開発研究所